

# グラムダン

—インドの土地革命・村落共同化運動の実態

シドゥハラジ・ダダ  
訳・上野允士

## 非暴力による第三の道へ

一九五一年、現在はインドのアンドラ・プラデッシュ州の一部となっているテランガナでは、小作人たちの不満で騒然としていた。

ヴィノバは、この地方への徒歩旅行を開始した。毎日、彼は村から村へと歩きまわり、人々と会い、彼らに語りかけ、彼らの問題を理解しようと試みた。四月一八日、彼がハイデラバードを出発して三日後に、ポチャンバリの村に到着した。いつものように、彼は家々をまわって人々の苦情を聞いて歩いた。土地を持たない貧しい人々は、彼らの悲しみを物語ってきかせ、土地をくれるようにとヴィノバに頼んだ。そうすれば、彼らの生活も少しはよくなるだろうというのである。そんな午後の集会で、ヴィノバはこの土地を持たぬ人々のために嘆願した。土地を持っている人々のなかで、だれかそれを寄進してくれる人がいないかどうか、と。貧しい人々の有様と、ヴィノバの訴えに心をうたれて、その地方の地主の一人であるラマチャンドラ・レディという男が、すぐに一〇〇エーカーの土地を贈ると申し出た。

あとになってヴィノバが言ったことであるが、この夜彼は一睡もできなかった。彼はくりかえし、その日の出来事のことを考えた。

土地が正當に分配されていないということ、ほとんどすべてのアジアの国々にとって大きな課題であったし、今後もそうでありつづけるだろう。中国は、この問題を解決するために力を用いなければならなかった。日本においては、マッカーサー將軍が法律の立法化を通してこの問題に介入した。おそらくインドは第三の道を示すことができるだろう。それは愛と哀れみと非暴力による道である。翌朝、ヴィノバは次の村へとむかった。土地を持たない人々のみじめな有様は、どこへ行ってもおなじだった。彼は、レディが土地を寄進した話を聞かせ、くりかえして地主たちにむけ彼のアピールを行なった。すると、すぐに一人の男が進みでて寄進を申し出た。このことが、誠実な努力によって人々に接すれば、経済的社会的な不正も非暴力によって改善されるのだというヴィノバの確信を強めた。このときから、ヴィノバは地主への訴えを続けていった。こうして、ブーダンあるいは土地寄進運動と呼ばれるインド独立後のもっとも大きな運動のひとつが生まれたのである。

次の一〇年間のあいだに、全インドで四〇〇万エーカーを超える土地が篤志地主によって寄進された。これらの土地のうち、二〇〇万エーカーがすでに五〇万を超える土地をもたない農民たちに分け与えられた。インド独立後の二〇年間、全インドを通して州政府によって土地のない人々のためにあらゆる種類の立法措置がなされた。だがそれらは、ウイノバの手に入れた土地の半分にも達しないものであった。このことを思い起こすならば、彼の業績の重大さがはつきりと理解されよう。

しかし、土地を持たない多くの人々にそれを分け与えるということは、インドの直面している多くの問題の一部をなすにすぎないものであった。インド社会のバックボーンを形作っている五八万にのぼる村々の生活は、数十年にわたる外国の支配によって貧困にされ打ちめられていたのである。社会的経済的不正と不平等とは、支配者によってうえつけられ、はぐくまれていた。それ故、国家全体を社会的経済的に再構築することが早急に必要なる仕事であった。そして、重要なことは、この目的を達成するための手段は何かという問題であった。中国と日本の例が引証された。たとえ法律の制定や政府の行動が、究

極においては力による制裁に依然として頼っていたとしても、こうした直接的な暴力の使用に干渉するのはやめよう。さらに言うならば、もし民主的手段によって社会的目的が達成されるべきであり、デモクラシー自身が保持されるべきものであるならば、暴力は人々を目標めさせることはないし、彼らの基本的なエネルギーを解放することもない。ウイノバは運動の将来の見通しを心に描いた。彼自身のことばを引用してみよう。

「あらゆる問題の解決のための非暴力という方法の発見は、私の主要な関心事である。土地の問題はただインドにとつてだけでなく、多くのアジアの国々にとつて基本的な問題となっている。だが土地問題の解決を求めることだけが私の目的ではない。私がかつと強い関心を払っているのは、この運動の中にとり入れられている非暴力の方法ということなのである。私は我々の運動を、この非暴力の精神と視点とからとらえたいと望んでいる。」

土地の寄贈の訴えをつづけながらも、彼の要求がそれで終りになるものではないということ、ウイノバは明らかにした。人生は、お互いに協力しあつてのりこえていくものであり、それはただ相互に愛しあい、助けあい、

分け与えあふことの中にのみ基づくものであつて、決して衝突と競争のうちにあるものではない。彼のはじめた運動は、こういったことを人々に理解させるためのひとつの手段にすぎないのだ。それは最初、土地のことから開始されたわけだが、なぜかという土地は、個人に属することはできぬということを理解するのが容易だったからである。土地は自然からの贈りものであり、それは神に属するものである。

## グラムダンの誕生

このようにブーダン運動は、最初のステップにすぎなかった。あとになってウイノバが言ったように「運動の最初のステップは、村のなかで土地を持たない人が一人もいないようにすることであり、最後には村に一人の地主もいないようにすることである。すべての土地は社会全体に属さなければならぬ」運動の革命的な進展の次の動きは、人々の自発的な動きによって示されたものだった。それはちょうどテランガナの一年あとのことだった。ウイノバはアター・ブラデッシュ州の北部でブーダン運動の伝導を続けていた。彼は

どこへ行つても、土地を持たない人々のために地主からの寄贈を受けた。彼はすでにその年のうちに一〇万エーカーの土地を集めていた。五月二三日、ウイノバはマングロウスと呼ばれる村の近くを歩いてきた。その途中で彼は地主のデワン・シャイウラガン・シンにひきいられた村人たちに会い、村の半分にあたる一〇一エーカーの土地の寄贈を受けた。

「すべての土地は神に属する」というウイノバのことは、シャトゥラガン・シンの心を補えた。マングロウスへ戻って、彼は村人たちを集め、彼の土地全部をウイノバに寄贈することを決めたと伝えた。マングロウスの全家族数は一〇五であったが、そのうちの六五家族が土地を所有していた。シャトゥラガン・シンは最も多くの土地を持っていた。残りの四〇家族は土地を持っていなかった。土地を持つている六五家族のうち六四家族がシンの決定に従うことにし、その翌日、ウイノバのキャンプをおとすれて、土地を進呈することを申し出たのであった。

それまで、ウイノバは土地を持たない人々のために、地主たちの土地の一部だけを分け与えらうことを訴えていた。だが今や、彼は新しい情況に直面していた。マングロウスの

住民たちは、今やすべての者が同じ地位に立つことになつたのである。マングロウスの村は、今、あらゆる社会的、経済的情況を変化させた新しい生活を始めることができた。ウイノバはマングロウスの人々に次のようなことを依頼した。まず公平な基盤のうえに立つて、彼ら自身で土地を再分配すること。そして、村の総会(グラム・サバ)を組織し、共同の意志と判断に基いて今後彼らの問題を処理していくこと。

道は今や開かれたのである。土地を持たない人々へ土地を与えるブーダン運動は、こうして公正かつ自発的な再分配にもとずいた村の土地全部の寄進という形をとるグラムタン運動へと開花していった。

ウイノバは、相変わらず土地の寄進を訴えつづけていったが、次第にグラムタンを強調するようになっていった。しかしながら、ほんとうの突破口は、オリッサ州において三年後にやつてきた。最初のグラムタンは、一九五三年一月に、ここで為しとげられた。二年後にウイノバがオリッサ州へ足を踏み入れたとき、グラムタンの数はまだ指で数えられるほどだったが、八ヶ月後に彼がアンドララへむけて立つときには、その数は八〇〇以上に

つていたのである。グラムタンは、とり分け、ボンベイ、マドラス、ビハール、アンドラの各州において勢いを得た。一九五七年のはじめには、その数はインド全体で二二〇〇に達した。インド全体の村落の数と比較すればそれはまだごくわずかなものであるけれども、グラムタンの思想が広く行きわたつたことは明らかである。マングロウスは、孤立した気粉れの現象ではなかつたことを立証した。

事実、グラムタンは今日までひろい範囲にわたつて注意をひきつけてきた。一九五七年四月の開発委員会での演説で、ネル首相は次のように述べている。「ブーダン運動は、偉大なる意義を持つている。それは、土地と土地の私的所有に対して新しい考え方を生み出したということだ。」同じ年の九月に、ウイノバの出席のもとにマイリア州のイエルワルにおいて高級委員会が開催された。それには、大統領、首相、大臣、各州の大臣、社会党、共産党をも含みこんだところの各政党的指導者も出席した。参加者は全員一致で、グラムタン運動を歓迎するということに同意した。彼らは又、グラムタン運動が村落の共同化に貢献し、土地の問題を解決するための心

理的な風土を作りだすだろうということで見の一致をみたのである。委員会は、この運動の自主的な性格と、非暴力という方法を採用するという点について特別の覚書を取り上げた。

しかしながら、その進歩はゆっくりとしたものであった。というのは、グラムダン運動は地主たちに非常に大きな犠牲を要求したからである。土地と財産に対する執着は、人間の最も深い本能に根ざすもののひとつである。人が所有しているもののわずかな部分でさえ手離すことは、やさしいことではない。特に、土地の所有権を放棄することは非常にむずかしいことなのである。ウイノバはこのことが分っていた。彼は又、こうした土地の放棄がばらばらになされたのでは、革命は決して実現しないということも知っていた。それは大衆の行動を要求している。それ故、ウイノバはグラムダンの内容を次のように規定した。

### グラムダンの要求

グラムタンは、これまで展開されてきたように次の四つの要求にもとづく。

(1)、土地の私的所有をせず、その所有権は

グラム・サバ(村の総会)において組織された委員会に委任される。

(2)、土地の所有者が、その所有を続ける場合でも、少くともそのうちの五割は土地のない人々のために寄贈する。あるいは、グラム・サバの決定に従ってそれ以上の土地を寄贈する。所有者は、グラム・サバの許可なくして土地を手離したり売ることはできない。

(3)、村の基金は、村のすべての家族が個人が、その年毎にそれぞれの収入か生産の三割(あるいはグラム・サバによって決められた割合)を平等に寄付することによって維持される。どちらも持っていない者は、村で決定されたなんらかの仕事で奉仕労働を行なう。

(4)、すべての大人の住民は、グラム・サバを構成し、村の出来事に関与し、全体の福祉に責任をもつ。グラム・サバは多数決の原理にはよらずに、全体の一致の原理に基づく。

村全体の土地の少なくとも五割がグラムタンに属することが可能なだけの十分な地主をも含めて、少なくとも七五割の住民が上の条件を承認するならば、その村はグラムタン

として認められる。さらに、村の基金や総会といったものは、村の組織と団結のために、そしてその発展のために非常に基本的に重要なことを示したのである。公正と平等と団結という基本にもとづいて再構成された村は、インド共和国に対して効果的な影響を与えた。ウイノバは、一九六五年五月、この運動をさらに強化するためにサルボダヤの活動家を招集した。全インドを通して、五八万の村落のうち、グラムダンの数はすでに一〇万に近づいていた。

### グラムダンの成果は何か？

ではグラムダン運動は、これらの村々にどのような変化をもたらしたのであるか。おそらくはまずこのことが指摘されよう。それは、この運動が村の物質的な発展や改良をめざすものではなく、現代社会で一般に認められている価値全体を革命的に変革することをめざすものであるということだ。それゆえ、最初の仕事とは、この変革の助けとなるような雰囲気を作り出していくということなのである。このことは、とにかくグラムタンを受け入れ、それによって変化した村の報告を集

めることによつてのみ示すことができない。

多くの村々は、物質的な発展においても、そしてそれよりも重要な精神や人間関係の領域においてもきわも立った変化を示したのである。たとえば、マドラス州のブトラグンドゥ(今のタミル・ナドゥ)において、多くの村の総会は最近の数年間、きわめて活動的であった。カナホイバティの村では、一九五八年に、二〇〇家族のほとんどすべてがグラムタンに加入することを決定した。今、この村のグラム・サバは月に一回の集まりを持つことになっている。それは、奉仕労働によつて村の小学校、幼稚園、寺院、労働者のための宿舍等の建物の建設を組織した。それは又、ミルク協同組合、サルボダヤ協同組合、そして婦人協会などを組織した。この地域のある村は、数年前に罪人たちでだけ作られた。グラムタン以来、着実な経済的社会的変化があらわれはじめた。村のお店や婦人組織、保育所をはじめめることに加えて、いろいろな細かいを処理する村の裁判所も作られた。二年前、食料の欠乏によつて物価が上昇してしまつたとき、村人たちは生産物を販売せずに、それを村に保存しておくことにした。この村は、こうして価格の変動と食料の欠乏とからまぬ

がれたのだつた。グラムダンの村々は、「基金」からの寄付をうけることによつて援助を受けた。アンドゥラの他の村では、奉仕労働によつて、貧しい人々と未亡人に対して優先的に家を建ててあげることになった。ビハール州のある村では、織物センターを作り、最近の数間に必要なすべての服を生産した。このようにして村からの出費をくいとめたのである。ラジャスタンの村ではいつでも、タルカ裁判所において山ほどの未解決の問題をかかえていたのだが、今では村の外でどのようないさかきもなくなくなっている。村の長は、あらそいをおさめるのに公平であるという信頼を得、彼はとなり村から呼ばれるまでになつた。

だが、グラムダン運動の正しい評価は、個々の村の業績にもとづいてのみなされるべきではなく、明確な社会的目的という背景においてなされるべきである。インド社会の発展について述べている最近の新聞で、インド計画委員会の議長であるD・R・ガドワッル博士は言っている。「経済制度の転換と非暴力による変革というひとつの実験は、いま進行中である。それがウイノバのブーダン・グラムダン運動である。疑いなく、これは新しい

実験である。もしも個人の手に生産手段がにぎられていけば、彼らは権力の集中に導かれるであろうし、金持はますます金持に、貧しい人はますます貧しくなっていくだろう。又一方、生産手段が主に国家に集中されれば、国家は独裁への欲望をおさえることができないうだろう。もしも、広く分散された自治的な経済体制が発達すれば、我々の安全は守られるであろう。これが、ブーダン・グラムダン運動において広く示されている考え方であるように思われる。」

グラムダン運動は、まちがいない地方へ新しい希望をもたらした。だがこの仕事は決して終ることがない。闘いは単に古い世代の偏見や外様に対するものだけでなく、うわべだけの利己主義にも対するものなのである。だが、グラムダン運動が、全く自発的でも公けの機関には関係のない運動であるということを考えれば、この運動の成功は偉大である。

